

対訳西鶴全集 十六

西鶴俗つれづれ
西鶴名残の友

訳注

富麻
士生
昭磯
雄次

明治書院

麻生磯次<あそう・いそじ>

富士昭雄<ふじ・あきお>

〔略歴〕 明治29年生。

〔略歴〕 昭和6年生。

大正9年東京大学文学部国文学科卒業。

昭和30年東京大学文学部国文学科卒業。

学習院院長をへて現在日本学士院会員。

駒沢大学文学部教授。

文学博士。



対訳西鶴全集 十六
西鶴俗つれづれ
西鶴名残の友

昭和五二年十一月五日印刷
昭和五二年十一月十日発行

二八〇〇円

高陽堂製本

著者 麻生磯次

発行者 富士昭雄

代表 明治書院

印刷所 三樹彰

代表 大文堂

梶原忠幸

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の十六
電話 二九二一三七四一
振替 東京 三一四九九一

©一九七七 麻生磯次

凡 例

一 本書は上段に原文を翻刻し、下段にその対訳文を収載した。

一 本文の作成にあたっては、最も信頼できる初版本を底本に選び、さらに諸本を参照して、可能な限り原文を忠実に翻刻するように努めた。挿絵はそのすべてを本文該当箇所に収めた。ただし、行移り・丁移りは原文によらず、なお適宜段落を設けた。会話に相当する部分に「」印をつけた。

一 句読点 原文には、両作品とも、白丸・点および黒丸・点が施されているが、その位置は必ずしも厳密なものではない。そこで諸注を勘案して新たに句読点をつけた。

一 漢字の翻字は、次のような方針によった。

1 正字体 原文の正字体はそのまま正字とした。ただし一般に通用されていない正字体はこれを避けた。

(例) 関↓間 疊↓曇

2 略字体 原文の略字体の内、現在も行われているものはそのままとした。これらの中には俗字・通用字等があり複雑であるが、しばらく略字として扱う。(例) 塩、积、条、声、体、才、宝、万、礼

ただし、右と同じ字でも正字を用いてある場合や、正字の行草体とまぎらわしい次のような略字は、正字に翻字することにした。(例) 栄、覚、勅、観、帰、国、齒、断、変、来、恋

3 異体字 読みやすさを考慮して、次のように正字体に改めた。これらの中には古字・同字・俗字・国字などがあ
るが、しばらく異体字として扱う。(例) 蟲↓喜、算↓算、救↓救、取↓最、杓↓杉、邊↓邊、役↓役
ただし、当時慣用のもので正字に直すことの不適当な異体字や、特定の正字に直しにくい同字は、特に残すこと
にした。(例) 菴、礪、哥、貞、鉢、柑、蘭、泪、寐、桤、煙、牢

4 当て字 当時の慣用ものはなるべく残すことにした。(例) 社↓迎も、風興

5 誤字・誤刻 明らかな誤字・誤刻や、固有名詞の誤字と思われるものは改めた。(例) 右↓古、鯨↓鯨
なお次のように、誤字であっても当時広く慣用されたものは、残すべきではあるが、読みやすさを考慮して、こ
こでは正字に改めた。(例) 勒↓勤、劬↓州

6 漢字につけられた濁点は、訓みを示すものとして妥当な振り仮名に改めた。(例) 共↓共、嬉↓悲し↓嬉し悲し
7 反覆記号は原則として原文のままとした。なお、漢字一字の反覆記号「々」は通行の「々」とした。

一 仮名づかい 原則として原文どおりにした。ただし、衍字や明らかな誤りはこれを正した。

一 振り仮名 原則として原文どおりにした。ただし衍字や明らかに誤りと思われるものは改めた。また、本来は本文
中にあるべき活用語尾や助詞が、振り仮名中に含まれている場合は、原文のままとした。(例) 取、神田橋たてる

一 清濁 本文および振り仮名の清濁表記には誤りや脱落があるので、新たに削補をおこなった。(例) いへとぞい
へども、書へし↓書べし、只↓只

一 半濁点 本文および振り仮名の半濁点の表記を欠くものにはこれを施し、半濁音表記をすべき箇所に濁点のつけら
れているのはこれを改めた。(例) さつはり↓さつぱり、ぼんと町↓ぼんと町、干瓢↓干瓢

一 特殊な略体および合字、連体字は現行の字体に改めた。(例) けし候、より、より参らせ候

一 語注 本文読解の便宜をはかつて、各章の終わりに語注を注記した。

一 付録 西鶴の読解鑑賞の一助として、巻末に本巻所収作品の「解説」ならびに「付図」を収めた。

「付図」は、『西鶴俗つれづれ』『西鶴名残の友』に関係の深いものを選んだ。なお、本全集の他の巻々の「付図」もあわせて参照してほしい。

一 索引 『西鶴俗つれづれ』『西鶴名残の友』を理解する上で、重要と思われる語句を選び、巻末にその語句索引を掲げた。

本巻の本文挿絵および「付図」の作品資料には、大阪府立中之島図書館所蔵の『西鶴俗つれづれ』、東洋文庫所蔵の『西鶴名残の友』を、また、東京大学総合図書館所蔵の『西鶴俗つれづれ』(再版本)の表紙と刊記を付図に、それぞれ使わせていただいた。

本文の注釈では、先学の研究成果をできるだけ参照した。

巻末の語句索引の作成には、長谷川八重子氏の御助力を得た。

以上の方々に、ここに記して深謝の意を表します。

目次

凡例

西鶴俗つれづ

序 二

卷一

目録 六

一 過て克は親の異見惡敷は酒 八

二 上戸丸はだかみだれ髪 三

三 地獄の釜へ酒おとし 七

四 おもはくちがひの酒樽 三

卷二

目録.....元

一 只取ものは沢枯梗銀で取物はけいせい.....三

二 作り七賢は竹の一よにみだれ.....三

三 まことのあやは後にしるゝ.....四

卷三

目録.....四

一 一世にはふしぎのなます釜.....五

二 悪性あらはす螢の光.....六

三 一滴の酒一生をあやまる.....七

四 酔ざめの酒うらみ.....七

卷四

目録.....八

一 孝と不孝の中にたつ武士.....八

二 序 嵯峨の隠家好色菴.....八

三 御所染の袖色ふかし.....九

四 是ぞいもせのすがた山.....九

卷五

目録	101
----	-----

一 金の土用千伽羅の口乞	102
二 佛の爲の常灯遊女の爲の髪油	113
三 四十七番目の分限又一番の貧者	118

西鶴名残の友

序	116
---	-----

惣目録	119
-----	-----

卷一

一 美女に摺小木	120
二 三里違ふた人の心	129
三 京に扇子能登に鱈	133
四 鬼の妙薬爰に有	135
卷二	
一 昔たづねて小血	136

二	神代の秤の家……………	一五
三	今の世の佐々木三良……………	一五
四	白帷子はかりの世……………	一六
五	和七賢の遊興……………	一七

卷 三

一	入日の鳴門浪の紅井……………	一七
二	元日の機嫌直し……………	一七
三	腰ぬけ仙人……………	一八
四	さりとては後悔坊……………	一八
五	幽霊の足よは車……………	一八
六	ひと色たらぬ一卷……………	一九
七	人にすぐれての早道……………	一九

卷 四

一	小野の炭がしらも消時……………	二〇
二	それ／＼の名付親……………	二〇
三	見立物は天狗の媒鳥……………	二〇
四	乞食も橋のわたり初……………	二〇
五	何ともしれぬ京の杉重……………	二四

卷五

一	宗祇の旅蚊屋	三〇
二	交野の雉子も喰しる客人	三三
三	無筆の礼帳	三六
四	下帶計の玉の段	三八
五	年わすれの糸鬘	三九
六	入齒は花のむかし	四〇
跋		四三
西鶴俗つれづれ・西鶴名残の友解説		四四
付 圖		四三
索引		四三

西
鶴

俗
つ
れ
ぐ

繪
入

一

西鶴俗つれづれ

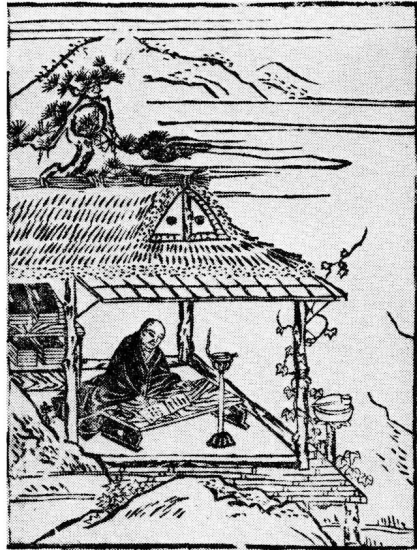
筆をとれば物かゝれ、盃をとれば酒を思ふ。爰にいにし年俳
林西鶴の作し置れし一つの書有。とるに捨る事を得ず、部せ
ん事を思ひ、まだ咲ぬ桜木にこと葉の花の盛なると、心の月
の限なきを雨にむかひてこふの思ひをなし、たれこめしつれ
づにつづりをかれし心をはかりて、梓にちりばめ、目出度
春のもてあそびにもと、下官がすけるにまかせて、世にひろ



むるにな
ん。誠に
鶴が心の
海廣く、
筆の林世
にしげき
事を思ふ
に、彼法
師の心に

西鶴俗つれづれ

筆を執ると物を書く気持ちになり、盃を手にすると酒を思
ふと、『徒然草』にあるが、そのとおりである。ここに先年俳諧師
西鶴が書いて置かれた一書がある。取り上げて読んでみると、そ
のまま放つて置くことができず、これを一部の書物にまともあげ
ようと考へた。まだ咲かない桜木に言葉の花の盛りを想像し、心
の月の限なきを雨に向かつて恋うような思いがして、部屋に閉じ
こもつて徒然に綴り置かれた作者の心を推し測り、これを板木に
彫つて、めでたい新春のお慰めにもと、私の好みにまかせて世に
広めようと思う。誠に西鶴の心の海は広く、その著作が世に多く
行われていることを思うと、あの兼好法師の精神に少しも劣るは
ずはない。そこで自分の好みにまかせ、たとえ書物のできが悪い



おさ／＼
おとるま
じと、予
が好む方
にまかせ
て、よし
や難波の
あしかる
とも、咎

にしても、それは教養のたりない私のせいということにして、新
春の慰みにもと、あの兼好法師の随筆の題号をかすめ取って、
『俗つれづれ草』と名付けたのである。

元祿八乙亥年

初春吉辰

書林 藤房

は下官^{やつがれ}がせばき心におふせて、あらたまる春のなぐさみにも
と、彼吉田^{だいがう}の題号をかすめとりて、俗つれ／＼ぐさと名づく
るになん有ける。

元祿八乙亥年

初春吉辰

書林

藤房

一 「筆をとれば物書かれ、楽器を取れば音（お）をたてんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ」(徒然、一五七)による。「盃をとれば酒を思ふ」は、本書前半の内容、酒に関する話に触れた表現。二 大坂の俳壇の意。談林派をさす。西鶴も天和元年から晩年にかけて、「難波俳林」と肩書を付けて自署することもある。「難波俳林／松寿軒／西鶴」(西鶴独吟百韻自註絵巻、序)。三 当時、印刷の版木(板木とも書く)には、多く桜を用いたのという。咲ぬ桜木・葉・花は縁語。四 以下は『徒然草』による表現。「花はさか

序

三

りに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛（ゆく）知らぬも、なほ其（あはれ）に情（なさけ）ふかし」（徒然、一三七）。
五 前注四参照。六 垂れ籠める。すだれやとばりなどをおろして、室内にひきこもる。前注四参照。七 「つれく／＼なるまゝに、日暮らし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書（き）つぐれば」（徒然、序段）による。八 梓に鎌（ちりば）む。（梓は中国で用いた版木の材で、書物を版木に影りつける、出版する意。）
九 当時新版の書はよく正月に売り出された。一〇 「僕 ヤツカレ」〔文選註、自称也、下官同（ヤツカレ）〕〔遊仙篇〕（書言字考）。「下官（ヤツカレ）の文字は卑下の詞なれども是官位ある人の謙退の詞也。我々風情のいひもてあつかふ詞文字にあらず」（警喻尽、五）。一一 心の広く深いことを海にたとえていう。歌語（和歌具竹集、七）。
「心の海広く」（永代蔵、三の二）。一二 書いた文章の多いことをいう。文林、詞林などと同意。「其はたらき聞伝て筆のはやし詞の山」（伝来記、序）。一三 難波のあし（戸・菰）は、悪しと掛け詞で、「難波の」は「あしかる」を引き出す序。なお善悪（ヨシアシ）・難波入江は、すぐ連想される語（類船集）。一四 吉田兼好の『徒然草』をさす。一五 一六九五年で乙亥（きのとい）の年。西鶴没後二年めの刊行。一六 書林の印。「藤房」は、版元の「八尾甚左衛門」の名乗（なのり）か。

叙

花の春、もみぢの秋去て、さだめなき時^一雨月のはじめ、此俗
つれづれ^二をながきかたみにして、松壽西鶴のかぎりある今は^三
の時、とりまぎれたるさうしの中より、この比見さらえて、
書林何某にゆづる。題号は、かの月^四の下、雪の朝、いとおも
しろく、愛あるものなれと、かける盃のこゝろにや。

元祿八亥龍集

松^八平^九
壽^八元^九

正月のはじめ筆を

浪花俳諧堂西鶴庵

團水撮

叙

西鶴が没してより、花の春、紅葉の秋が過ぎて、いつしか空模様
の定まらない十月^一となった。この『俗つれづれ』を長の記念とし
て、松寿軒西鶴はこの世を去ったが、その臨終の際に取り紛れて
しまった草稿の中から、このごろこれを拾い出して、書肆の何某
に与えることにした。書名を『俗つれづれ』としたのは、『つれ
づれ草』に、「月の夜、雪の朝などに、友人と盃を取り交わすの
は、いちだんと面白く興を添えるものだ」と書いてある、その盃
の文意を取り入れたものであろうか。

元祿八亥竜集

松^八平^九
壽^八元^九

正月のはじめ筆を

浪花俳諧堂西鶴庵にて

團水撮

一 陰曆十月の異名。本条の解釈に二説あり、一説は十月の初めを西鶴の没時と解し、西鶴は元祿六年八月十日に没しているから、これは団水の筆の誤りとする。今一説は、十
月の初めというのは、団水が西鶴の遺稿を書肆（しよし）に与えた時とする。要するに、西鶴庵を受け継いで間もない団水が、西鶴の没時を誤記することは考えられないので、
後説に従いたい。二 松寿軒。西鶴の軒号。三 臨終の時。四 「月の夜、雪の朝（あした）、花の本にても、心長閑（のどか）に物語して盃出したる、万の興をそよ
わさなり」（徒然、一七五）による。五 りゅうしゅう。りょうしゅうともいう。（竜は星の名で、集は宿の意で、この星は一年に一周するところから）一年をいい、転じて
多く年号の下に記す語となる。歳次。六 西鶴の没後、京都にいた北条団水は、大坂鋪屋町（やりやまち）の西鶴庵を守って、西鶴の遺稿を整理出版した。すなわち西鶴庵と
西鶴の軒号（松寿軒）を継承したので、時にこれを用いる。七 北条氏。談林の俳諧師で、西鶴の門人。『色道大鼓』『一夜船（いちやふね）』『日本新永代蔵』などの浮世草子
作者。別号に白眼居士・滑稽堂などがある。元祿八年は団水三十三歳に当たり、宝永八年四十九歳で没。「撮」は筆をとる意。八 西鶴から受け継いだ団水の軒号。九 団
水の印記。諸書の序文には、平元のはか、顯妙・義延などの印記もあり、そのいずれかが字（あざな）であらうといわれる。

西鶴俗つれぐ 卷一 目錄

○ 過^すて能^よは親^いの異^け見^み

あしきは酒

門にきん酒の札
兼好が公事相手
大いびき初夢
説經も聞所^{きこ}
隣の酒盛に頭痛

○ 上戸丸裸^{じょうご はだか}

みだれがみ

今の世の間鍋^{かん}の綱
しるしの大きかづき
よう御存知の巾着
思ひよらざるおいはぎ
不動参りのいひ立

一 兼好が自分の公事（裁判）の相手、すなわち兼好をお上に訴えてやるの意、兼好が「下戸（げこ）ならぬこそをのこはよけれ」と『徒然草』に書いたのは、けしからんと腹を立てていう。本文参照。

二 説經淨瑠璃。仏教の説經が歌謡化し、和讃・平曲などの影響を受けて、近世初期に流行した語り物の一。長柄の傘をさし、三味線・胡弓・ささらなどを伴奏に門（かど）付けた門説經などもあったが、寛文ごろには操り人形劇と提携して劇場で興行されるようになり、万治・寛文ごろを全盛期とし、やがて義太夫節に圧倒されて享保ごろ衰えた。代表的作品に、『刈萱（かるかや）』『三莊（さんしょう）太夫』『信田妻（しのだづま）』『しんとく（役徳）丸』『小栗判官』などがある。説經節とも。

三 聞きどころ。聞く価値のあるところ。

四 間鍋。酒の燗をする役の鉄または銅製の小形の鍋。注ぎ口と致（つる）がついている。間鍋の綱は、源頼光の四天王の一人渡辺の綱をもじったあだ名。